

ヨブ記 36 章 22 節－39 章 「自然にある神の経綸」

1A 天にある奇しい御業 36:22－37:24

1B 偉大な教師 22－33

2B 人の手を封じ込める業 1－13

3B 見つけられない超越者 14－24

2A 神からの尋問 38:1－38

1B 男同士の会話 1－3

2B 大地の設置 4－21

3B 天の設置 22－38

3A 御しえない動物 38:39－39:30

1B 全く神に拠り頼む動物 39－41

2B 人の営みを嘲笑う動物 1－25

3B 主の力を示す動物 26－30

本文

ヨブ記 36 章を開いてください。私たちの学びは、ヨブに対するエリフの言葉の途中から読んでいきます。22 節から読んでいきます。エリフがヨブに対して語っていたことの論点を思い出してみましよう。彼の主張は、これまでのヨブの友人三人のそれとは異なっていました。ヨブの友人三人は、ヨブがこれだけの苦しみを受けているのは、ヨブが隠している罪があるからに他ならないというものでした。苦しみが神の罰の現われだと考えていました。けれども、ヨブは「私はこの苦しみを受けたようなことをした覚えはない、私は正しくて潔白だ」と主張しました。

しかしエリフの、苦しみに対する見方は異なっていました。「33:14-18 神はある方法で語られ、また、ほかの方法で語られるが、人はそれに気づかない。夜の幻と、夢の中で、または深い眠りが人々を襲うとき、あるいは寝床の上でまどろむとき、そのとき、神はその人たちの耳を開き、このような恐ろしいかたちで彼らをおびえさせ、人にその悪いわざを取り除かせ、人間から高ぶりを離れさせる。神は人のたましいが、よみの穴に、入らないようにし、そのいのちが槍で滅びないようにされる。」

苦しみを、神がご自分の注意喚起するための方法であると考えていました。神が語られているのに、それを人間が気づいていない。このままでは、その人はその悪の中で滅んでいってしまうかもしれない。そこで主が苦しみを与えて、その苦しみの中で神に気づき、神を呼び求めるようにされているのだ、ということです。この見方であっても、1-2 章に明らかにされているヨブが苦しむ理由にはなっていませんが、ヨブの罪から来る罰であるという友人の見方よりは、より真実に近づいたものになっていました。

それよりもエリフがヨブの言葉についていらだち、怒ったのは、ヨブが自分は正しいのだと主張するために、神が不当な痛みを与えているのだと言って神が不正だとして責めていることでした。ヨブは、全てのことは神から来ているという強い信仰を持っていました。そこで、自分の受けている肉体の痛みは、すべて神が引き起こしているものであると受け止め、それによって神を感じ取っていました。したがって、神が自分の体に矢を打ちつけているような仕打ちをしていると感じました。ヨブの信仰は、自分に起こっている小さな事柄について神が関わっておられるというものでした。神をそれだけ個人的に知ろうという努力です。ところが、ヨブが叫んでも、答えがありません。それで、神が不当なことをしているという主張をさらに強めていったのです。

そこでエリフが怒りました。神が悪を行なうだと、そんなことは絶対にあり得ない。そのような中傷を神に言い立てていること自体が罪であると断じました。そしてヨブが、神からの答えがないと言っていることに対するエリフの答えは、「神は超越者だ」ということです。「33:13 神は人よりも偉大だからである。なぜ、あなたは神と言い争うのか。自分のことばに神がいちいち答えてくださらないと言って。」神は私たちの世界をはるかに超える方であって、私たちの思いでは測り知ることのできない御心を持っておられるのだから、いちいち人間の訴えに答えるような僕ではないのだ、ということでした。

私は、どちらも正しい主張をしていると感じます。つまり、ヨブにとっての神は人格者であられ、人の痛みや苦しみを全て知っておられ、その弱さに関心を持っておられる方です。しかしエリフにとっての神は超越者であられ、人の思いをはるかに超えてご自分の御心を行われる偉大な方ではありますが、これもその通りです。したがって、ヨブもエリフもどちらも宣言した、保証人、仲裁者こそが人の受ける痛みに対する解答となるのです。ヨブがそれを語り、そしてエリフも語りました(33:23)。神の身分を持っておられるのに、人の姿を取り、十字架の死に至るまで神に従われたイエス・キリストこそが私たちの苦しみの解答です。

1A 天にある奇しい御業 36:22-37:24

そして、エリフは長い弁舌を終わりに向けて話し始めます。今日学ぶところは、鍵になる言葉は「嵐」です。エリフが語り始めていた時に、神が嵐をもってヨブに現われようとしていました。その嵐を感じ取ったエリフは、神の偉大さにある徴をもって論じながら、その弁舌を終えていきます。

1B 偉大な教師 22-33

36:22 見よ。神は力にすぐれておられる。神のような教師が、だれかいようか。36:23 だれが、神にその道を指図したのか。だれが、「あなたは不正をした」と言ったのか。

私たち人間は、しばしばこの過ちを犯しています。「神がなぜ、こんな痛みを与えておられるか。」と言うときは、言葉を変えるなら「私であれば、こんなことをしないのに。」というものであります。神よりも、良い考えを持っている。そうすれば、神は人々にもっと多く信じられて、受け入れら

れるのに、と思っているのです。神は私たち人間に、指示されるような方なのではないでしょうか？いいえ、神は圧倒的に大きな知識を持っておられて、ご自分が何を行なわれているかを分かっておられ、私たちが神を教師であると仰ぎますが、神が私たちの教師になる必要は全くないのです。

36:24 人々がほめ歌った神のみわざを覚えて賛美せよ。36:25 すべての人がこれを見、人が遠くからこれをながめる。

全世界のあらゆる人が認めることができる神の御業があります。それは自然です。自然の成り立ちを観察する時に、私たちはただ神の知恵のすばらしさに圧倒されるばかりであります。

36:26 見よ。神はいと高く、私たちには知ることができない。その年の数も測り知ることができない。

神は、いと高きところにおられる方です。地上に生きている私たちには、全く手の届かない超越された方です。しかし、「私たちには知ることができない。」というのは、その通りでしょうか？ちょうど親が子に自分のことを知らせるように、いと高き所におられる神は幼子のような者たちにご自分を知らせてくださいます。「ルカ 10:21-22 天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえます。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした。すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、子がだれであるかは、父のほかには知る者がありません。また父がだれであるかは、子と、子が父を知らせようと心に定めた人たちのほかは、だれも知る者がありません。」神が私たちにご自分を示されることによって、私たちは神を知ることができます。

36:27 神は水のしずくを引き上げ、それが神の霧となって雨をしたたらせる。36:28 雨雲がこれを降らせ、人の上に豊かに注ぐ。36:29 いったい、だれが雲の広がり、その幕屋のとどろきを悟りえよう。36:30 見よ。神はご自分の光をその上にまき散らし、また、海の底をおおう。

エリフは、水の循環を細かく説明しています。海や湖、川から出てくる水蒸気が気流に乗って上昇します。それが霧となり、それが粒となり、雨として落ちていきます。そして、人々に潤いをもたらすのです。そして、雲はどんどん形を変えて動いていきます。このメカニズム、一つ一つの雲の動きを作っておられるのは神であります。人間には知る由がありません。また、飛行機で上昇すればすぐ分かりますが、厚い雲に空が覆われても、その上は快晴です。晴れば、その光線が海の底まで辿りつきます。

36:31 神はこれらによって民をさばき、食物を豊かに与える。

ここの「さばく」というのは、治めるということです。神は雨を降らせ、また止ませることによって、人々の営み、特に食物について支配しておられます。私たち都市生活をしている者たちにとって、

この面において傲慢になります。食料はいつも、スーパーマーケットとコンビニに行けば一年中あると思います、そこで自分の命は自分たちで支えているのだと思います。しかし、農業を営んでいる人々にとってはそうではありません。自分たちがどんなに努力しても、天候が芳しくないの良い収穫を得られないのです。したがって神は、天候を治めることによって、人が神に頼り頼まなければいけないことを教えておられるのです。

36:32 神はいなずまを両手に包み、これに命じて的を打たせる。36:33 その雷鳴は、神について告げ、家畜もまた、その起こることを告げる。

雨が降り、そして嵐がきます。その時に、稲妻と雷が落ちます。稲妻が落ちる時は雨のようにいろいろな所に落ちるのではなく、的を絞って落ちてきます。これもまた、神が成しておられることです。そしてあの、ゴロゴロという雷鳴はまさに神の声であるとエリフは言っています。家畜も、雷鳴が来る時に、人間よりも先にそれを感知します。

2B 人の手を封じ込める業 1-13

37:1 これによって私の心はおののき、その所からとびのく。37:2 しかと聞け。その御声の荒れ狂うのを。その御口から出るとどろきを。37:3 神はそのいなずまを全天の下、まっすぐに進ませる。それを地の果て果てまでも。37:4 そのあとでかみなりが鳴りとどろく。神はそのいかめしい声で雷鳴をとどろかせ、その声の聞こえるときも、いなずまを引き止めない。37:5 神は、御声で驚くほどに雷鳴をとどろかせ、私たちの知りえない大きな事をされる。

雷鳴が神の声であるというのは、その音がそのまま神の声という事ではありません。「詩篇 19:1-4a 天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。話もなく、ことばもなく、その声も聞かれない。しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた。」太陽が出て、その軌道を走り、沈む中でそこに物理的な声を聞くことは、もちろんありません。しかし、これらのものを動かしておられる神がおられるという、その臨在の声は聞こえてくるのです。物理的にではなく、霊的に聞こえてきます。

しかし、穏やかな天候や、穏やかな自然において神は語っておられるけれども、人間はなかなかこれを認めようとしません。しかし、稲妻が落ち、雷鳴が轟けば無視することはできません。自分たちの行なっていることをやめて、否が応にも自然の驚異を感じざるを得ないのです。今、「自然の驚異」と言いましたが、自然そのものが神々のように生きているのではなく、その自然を造られている神ご自身を感じるのです。

37:6 神は雪に向かって、地に降れ、と命じ、夕立に、激しい大雨に命じる。37:7 神はすべての人の手を封じ込める。神の造った人間が知るために。37:8 獣は巣にもぐり、ほら穴にうづくまる。37:9 つむじ風は天の室から吹き、寒さは北から来る。37:10 神の息によって氷が張り、広い水が

凍りつく。37:11 神は濃い雲に水気を負わせ、雲が、そのいなずまをまき散らす。37:12 これは神の指図によって巡り回り、命じられるままに世界の地の面で事を行う。

エリフは先に食物を豊かに与えること(36:31)、つまり秋の季節について語りましたが、今は冬の季節について語っています。神は、同じように冬にも大雨を降らせ、冷たい雨が降りしきります。そして温度が下がれば、それは空で雪となり非常に降っていきます。そして、地上にある水は寒気によって氷となります。そして、この気象も雷鳴と同じように、私たちに神への畏敬を与えます。7-8 節にあるように、積雪によって私たちは自分たちの活動を止めなければならないからです。動物も同じで、「ほら穴にうづくまる」というのは冬眠のことです。

私はこのエリフの言葉を通して、冬にある積極性を見出しました。花を咲かせる春、葉を生い茂らせる夏、そして収穫を実らせる秋には、神の命を感じることができるかもしれませんが、冬においてはどのようにして神の命を感じることができるのでしょうか。エリフのこの言葉から、私はむしろ冬が好きになりました。冬にこそ、自分の活動を止め、神が自分に何を語られるかを感じ取る機会が増えます。そして、冬には、あらゆる可能性が秘めています。木には葉っぱ一つついていなくとも、その枝の中には春に吹き出す芽が隠されているのです。ですから、希望があります。

37:13 神がこれを起こさせるのは、懲らしめのため、あるいは、ご自身の地のため、あるいは、恵みを施すためである。

同じ厳しい天候であっても、ある時には恵みがあります。積雪があるからこそ、夏に至るまでの水が山の中に蓄積されます。けれども、同じ天候が人々を雪崩によって押しつぶしたりして、懲らしめにもなります。

3B 見つけられない超越者 14-24

37:14 これに耳を傾けよ。ヨブ。神の奇しいみわざを、じっと考えよ。37:15 あなたは知っているか。神がどのようにこれらに命じ、その雲にいなずまをひらめかせるかを。37:16 あなたは濃い雲のつり合いを知っているか。完全な知識を持つ方の不思議なみわざを。

改めてエリフはヨブに稲妻について語って、「これに耳を傾けよ」と促しています。その耳を傾ける、ということは、その音そのものに耳を傾けるのではなく、どのようにして稲妻が黒雲の中で神が発生させているのかをよく考えなさい、と言っているのです。そこに、私たちの思いでは測り知ることのできない不思議があり、神の領域があるのだとエリフは言っているのです。

私たちは耳を傾けないで、あるいは目に留めることなくして、通りすぎるのがあまりにもたくさんあります。日本の人たちにイエス・キリストのことを伝え、「私は、イエス・キリストについて聞いたことはありませんでした。」と言います。確かにそうなのかもしれません。けれども実は、毎日歩

いている通りに、十字架の付いた教会の建物があつたのに、全然知らなかったということがあつたでしょう。けれども、目に留めていないので、教会の建物、またそこに掲げられている聖書の言葉さえ存在しないものとなつてゐるのです。これが午前中話した、人の「無知」であります。耳を傾けることをしないから、あるものさえ思いの中では無いものとしてしまう心の頑なさがあるのです。

37:17 また、南風で地がもだすとき、あなたの着物がいかに熱くなるかを。37:18 あなたは、鑄た鏡のように堅い大空を神とともに張り延ばすことができるのか。

エリフは、秋、冬を話し、ここで夏を語つてゐます。「南風」というものがいかに熱いか、その衣服が触れなくなるほどのものであることは、私たち日本人には実感ができません。けれども、アラビアの砂漠地域から吹いてくる東からの風が、このような熱風をもたらします。そして空を「鑄た鏡のように堅い大空」と形容してゐます。乾燥した気候の中で育つてゐる人によつて、「良い天気」とは雨が降ることであり、悪い天気は雨が降っていない青空だという話を聞いたことがあります。そのような空を形容してゐるのでしょう。

37:19 神に何と云うべきかを私たちに教えよ。やみのために、私たちはことばを並べることができない。37:20 私が語りたつと、神にどうして伝えられようか。人が尋ねるなら、必ず彼は滅ぼされる。37:21 今、雨雲の中に輝いてゐる光を見ることはできない。しかし、風が吹き去るとこれをきよめる。37:22 北から黄金の輝きが現れ、神の回りには恐るべき尊厳がある。

今、真っ黒な雲が空を覆つており、この時点で天におられる神に語りかけることはできない、といふことをエリフは言つてゐますが、これはもちろん靈的な意味が含まれてゐます。神の偉大さに耳を傾けないヨブは、その思いが暗くされておられ言ひ分を並べたつても、それが神に届くことはないと言つてゐるのです。この雲の上には黄金の輝きが用意されておられ、風で吹き去れば神の尊厳を見ることができるとも、雲が遮つてゐるだけであり、その黄金の輝がないということではありませぬ。同じように、今、自分が苦しんでゐても、それは神が意地悪をしてゐるということではなく、その雲の上の輝きのように、神は憐れみをもつておられる。けれども、それを認めず、神が意地悪な者であると断定するヨブは、裁きを免れることはできないとエリフは言つてゐます。

37:23 私たちが見つけることのできない全能者は、力とさばきにすぐれた方。義に富み、苦しめることをしない。37:24 だから、人々は神を恐れなければならない。神は心のこざかしい者を決して顧みない。

これが、エリフの結論です。全能者は力とさばきに優れてゐます。今、天におけるしるしを辿つてきて、それが分かります。ゆゑに、義に富んでおられ、苦しめることはしないとゐます。これはヨブに対する反論です。神が自分を苦しめてゐるとヨブは言ひ続けました。そして、神を恐れると言つてゐますが、自分の理解によつて神を押し量るのではなく、自分の理解をはるかに超える神を

認めよ、と言っています。そして、最後にヨブを戒めています。自分の受けている苦しみによって神を推し量っている限り、神はあなたの叫びを聞くことはない、ということです。

確かに、エリフの言っていることはその通りです。神について問われ、必ず何か悪いことを取り上げて、「こんなことを神は許すのかね。」と疑いかかる人の心に、神が顧みてくださることはありません。そのように問いかけてはいても、実は真剣に神を求めている訳では全然ないのです。むしろ、自分には何もできないというへりくだりの中で、自分が生きているのではなく神が生かしてくださっているのだ、そしてこの世界も神によって成り立っているのだと悟るからこそ、神がその人に語りかけてくださいます。

しかし、エリフからは、個人的に交わる、小さな事ながらも関わってくださる神の姿を見ることはできません。その部分において、ヨブは直球で神に問いかけていたのです。人格的に交わりたいと願っていたのです。私たちは、すべての判断を主にゆだねて、自分の思いをはるかに超えたところで動かしておられる神に感謝すると同時に、自分に関わる小さな事ならについて、共に痛み、共に悩み、共に喜んでおられる方に、イエス・キリストにあって出会うことができます。

2A 神からの尋問 38:1-38

そして、その嵐の中で神が現れてくださいます。

1B 男同士の会話 1-3

38:1 【主】はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。38:2 知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者はだれか。38:3 さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。

嵐の中から語られる主について、また知識がないのに神の経緯、つまり取り計らいを暗くすることについて、そして神に尋ねるのではなく、神から尋ねられることについて、私たちは午前礼拝で学びました。そして午前に取り扱わなかった、「あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。」についてお話ししたいと思います。これは、戦いに出ていく時に、動きを早くするために衣の裾を上げる行為です。当時は、布一枚で衣ができており、いわゆるワンピースのようになっていましたから、その裾を腰に帯を締めることによってあげることができます。すなわち、「しっかりと心を引き締めなさい」と神は語っておられます。

他の訳では、「あなたは腰に帯して、男らしくせよ。(口語訳)」となっています。使徒パウロは、コリントの教会の人たちに「男らしく、強くありなさい。(1コリント 16:13)」と言いました。男らしくするとは、何でしょうか？これは、逃げないということです。臆病になって退かないということです。自分のしていることに責任を持って、ということです。問われているのに、答えないということはあってはいけません。いろんなことを話しているにも関わらず、肝心なことを問われると、責任を取りたくない

ので、するっと逃げるということがあってはならないということです。

これは、「神の前で申し開き」することでもあります(ヘブル 4:13)。このことを避ける人は、最終的に滅びます。新しいエルサレムに入れられない人の中には、「おくびょう者(黙 21:8)」がいます。男女関わりなく、真実な神との関わり、また主にある成長を遂げたいと願う人は、持っていなければいけない態度です。いつまでも、これを避ける人は主にあって成長することができません。ヨブは、神のこの問いかけに対して、辛く、そしてとても痛いものでしたでしょうが、最後は、神の前で心からの悔い改めをすることができました。これこそ、腰に帯して男らしくすることです。

2B 大地の設置 4-21

38:4 わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。38:5 あなたは知っているか。だれがその大きさを定め、だれが測りなわをその上に張ったかを。38:6 その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。38:7 そのとき、明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ。

エリフは、天に現れる嵐によって神の偉大さを説きましたが、神ご自身はいきなり、本題から入ります。すべての人の営みは、どんなことがあってもこの大地がなければ成り立ちません。今、「腰に帯をしめよ」と主が言われたように、そのまま、直球でヨブに問いかけられるのです。ところで、この問いかけは、深い信頼関係がなければできないことではないでしょうか？ヨブも直球で神に問いかけ、神も直球でヨブに問いかけておられます。このような真実な関係を神に対して、そして人との間に結べるようになれば、すばらしいことです。

神はいま、土地を据えることを建築に形容して話しておられます。創世記 1 章 2 節に「地には形がなく」とありますが、形づくられてはいないけれども地そのものがありました。この土台があって、すべてのことが成り立っているのですから、私たちに大きな試練があって、それでいったい神はこんなことをどうして行われるのだと嘆いていても、その嘆いている自分は神の造られた土台の上で安心して立っている、あるいは座っているのですから矛盾していると言わざるをえません。

その大切さを、天にいる者たちを賛美しているところからも分かります。ここの「明けの星々」「神の子たち」というのは、天使たちのことです。天使は神の栄光を反映しているので、星のような輝きがあるし、神の子たちというのは、神によって造られた被造物ですから、そう呼ばれています。私たちは、キリストにあって神の養子縁組とされているので神の子どもと呼ばれています。ここでは世界の基が据えられていること自体を顧みて賛美したことがあるのか、ということです。

そして私たちキリスト者には、この上もない祝福に満ちた約束があります。この土台を神が据えられる時には既に、キリストにあって私たちを選んでおられたということです。「神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちにあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。

(エペソ 1:4)「これだけ神の選びは確かであり、永続するものだということです。

38:8 海がふき出て、胎内から流れ出たとき、だれが戸でこれを閉じ込めたか。38:9 そのとき、わたしは雲をその着物とし、黒雲をそのむつきとした。38:10 わたしは、これをくぎって境を定め、かんぬきと戸を設けて、38:11 言った。「ここまでは来てよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ」と。

地に次いで、神の創造の基本は海であります。創世記 1 章 2 節において、「やみがたいなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。」とあります。そして光ができ一日目、そして水と水の間に大空があり二日目ですが、それゆえ 9 節、水滴の集合体である雲がそこにあります。おそらく水の層が当時はあったのですが、ノアの時代の洪水の時にかなり下に落ちることによって世界に大洪水が起こりました。そして三日目に、天の下の水が一つの所に集まり、それで水が海、乾いたところを陸と名づけています。

海というのを、神は聖書の中でいろいろな霊的意味を持たせています。例えば天地の創造は、海があり、それから御霊によって命を神が造られたのが、イエス様はニコデモに新しい霊の誕生について話す時に、「人は水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることができません。(ヨハネ 3:5)」と言われました。事実、胎児は羊水という水の中で育てられ誕生するのです。それから、肉として誕生した者がイエス・キリストを心に受け入れることによって、霊的にも生まれます。

ここで主がヨブに強調していることは、海というものが荒れ狂う高ぶりであるという点です。海を母親の胎内から出てくるように形容しておられますが、そこに戸で閉じ込めたとあります。これは、溢れ出る水を堰き止める戸であります。もしこれがなければ海は地球全体を覆う勢いをもっており、今、陸地に自分が立っているところも水で覆われてしまうということです。詩篇の著者も、同じことを語っています。「104:9 あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました。」地球儀や世界地図を思い出せば、私たちがろうじて守られている様子を感じ取ることができるのではないのでしょうか。陸と海の比率は実に、3対7であります。しかし、高ぶるように海辺に押し寄せてくる波があろうとも、陸地に入り込んで来るのは、たかが知れており、私たちは神の守りによって、この乾いた地の上で生きているのです。

神は、大国の荒れ狂う姿を海に例えてダニエル(7:2)に、また使徒ヨハネに黙示録で(17:15)示されました。しかし午前礼拝の説教で引用しましたように、神は「主の前で静まれ(ゼカリヤ 2:13)」と言われ、荒れ狂う波をイエス様はしずめられました。私たちが地上でいろいろな試練にあっても、実は大方、そのほとんどが神に守られている環境で生きているのです。その静けさを私たちは、神に感謝すべきなのです。

38:12 あなたが生まれてこのかた、朝に対して命令を下し、暁に対してその所をさし示し、38:13

これに地の果て果てをつかまえさせ、悪者をそこから振り落とさせたことがあるか。38:14 地は刻印を押された粘土のように変わり、衣服のように色づけられる。38:15 悪者からはその光が退けられ、振りかざす腕は折られる。

夜から朝がやってきて、これまで暗く見えなかったものが、鮮やかに、光よあれと言われて、それから夕があり、朝があったこと教えています。非常に興味深いのは、この光によって暗がりや悪いことをしている者たちがどんどん暴かれている姿を描いていることです。聖書の中で、暗闇は悪の行いを表し、光は神の聖さを示しています。「ヨハネ 3:19-20 光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」

ヨブは、悪者が栄えているように見えているのはどうしてなのか、という問いかけをしましたが、神は確かに悪をご自分の光によって暴かれると約束しておられます。神はその証しを、毎朝、光を与えられることによって示しておられ、その原則をすべての人間の行いに対しても当てはめられることを約束しておられるのです。イエス様は言われました。「おおいかぶされているもので、現わされないものはなく、隠されているもので、知られずに済むものはありません。(ルカ 12:2)」

38:16 あなたは海の源まで行ったことがあるのか。深い淵の奥底を歩き回ったことがあるのか。
38:17 死の門があなたに現れたことがあるのか。あなたは死の陰の門を見たことがあるのか。

再び海について語っておられますが、今度は海の底、その源にまで及んでおられます。主は、ヨブに挑んでおられます。ちょうど探究の旅に行くかのように、「行ったことがあるのか」「歩き回ったことがあるのか」そして「現れたことがあるのか」「見たことがあるのか」と突っ込んでおられます。

ここで大事なことは、その深い淵のところに「死の門」があるということです。聖書は、海において罪が葬られ、そして罪から来る死は、その底に戸を持っている陰府にあると言っています。「ミカ 7:19 もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ入れてください。」そして、そこは悪霊どもの行先にもなっていました。イエス様が、レギオンを豚に移ることを許され、レギオンがガリラヤ湖になだれ込んだことを思い出してください。そして私たちの住んでいる天地が過ぎ去る時、神の最後の審判がありますが、その時に「海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。(黙示 19:13)」とあります。そして新しい天と新しい地が造られた時、そこには海そのものがないのです。

ですから、ヨブはその苦しみの中で死を願い、その後に陰府に入るのだと何度も繰り返しましたが、そこにまであなたは行ったことがあるのか、と神は挑んでおられます。私たち人間は、あまりにも簡単に死を選びますが、その後になくなるのか本当に分かって死んでいるわけではありません。分かっていないのに、悩んでいる時に死ぬことを選択肢にしているのです。

38:18 あなたは地の広さを見きわめたことがあるのか。そのすべてを知っているなら、告げてみよ。
38:19 光の住む所に至る道はどこか。やみのあるその場所はどこか。38:20 あなたはわたしをその国まで連れて行くというのか。また、その家に至る通り道を見分けるというのか。38:21 あなたが知っている……そのとき、あなたが生まれ、あなたの日数が多い、と。

海の底が深みについて語っているなら、ここの光と闇は広さについて語っています。この生きている地上で、はるか遠くにある日の出の時の光、その先にあるものを知っているのか？また、日没の時の先にあるものを、どこまで知っているのか？と神は尋ねているのです。ヨブは、「東に行ってもその方はおられず、西に行っても見定められない。(23:8 新共同訳)」と言いましたが、その先に行ったからそんなことを言っているのか？と仰っています。そして神は皮肉を語られています。そんなことも、あなたは知っているね。その時にすでに生まれていて長く生きているから、もちろん知っていることでしょう、と。

私たちは、自分が見て、自分の聞いている世界がいかに狭く、限界があるかを知らないといけません。その小さい世界から全てを見ているかのように判断していくことが、神がヨブに言われた、「知識もなく言い分を述べて、摂理(経綸)を暗くする」ということでもあります。自分の知覚で神が把握できないから神がいないと断定するのは、あまりにも稚拙な考えです。把握できないからこそ無限の神を感じ取ることができるのです。理解できる神ならば、自分と同じかそれ以下の神です。理解を超えるからこそ、自分を超越する方であり、あがめ礼拝するに値する方なのです。

そして神は、エリフも語っていた天における動きについて語られます。

3B 天の設置 22-38

38:22 あなたは雪の倉に入ったことがあるか。雹の倉を見たことがあるか。38:23 これらは苦難の時のために、いくさと戦いの日のために、わたしが押さえているのだ。

嵐において降る雹は、神がご自分の敵を倒すために使われることがあります。ヨシュア率いるイスラエルが五人のカナン人の王の兵士たちを追っている時に、天から雹が降ってきてその逃げている兵は次々と殺されていきました(10:11)。ここから主はヨブに、人間がまったく制御できないところで、物事が決まってくる世界を教えていかれます。戦争をする時に、自分たちの戦略と戦術の通りにうまく行くことは少なく、天候によって勝敗が左右されるのです。

38:24 光が分かれる道はどこか。東風が地の上で散り広がる道はどこか。38:25 だれが、大水のために水路を通し、いなびかりのために道を開き、38:26 人のいない地にも、人間のいない荒野にも、雨を降らせ、38:27 荒れ果てた廃墟の地を満ち足らせ、それに若草を生やすのか。

嵐によって、人がいくら努力しても緑化できない荒地であっても、そこに草が生えます。これによ

って、人間の努力や計画によって全く成し遂げられない事が起こっていることを示しています。(ローマ 9:16)

38:28 雨に父があるか。露のしずくはだれが生んだか。38:29 氷はだれの胎から生まれ出たか。空の白い霜はだれが生んだか。38:30 水は姿を変えて石のようになり、深い淵の面は凍る。

次に神は天体にある幾何学的な不思議について語られます。同じ H₂O が、雨に露に、氷に、そして霜に変わります。雪の最小単位である結晶は、こんな美術的なものはないだろうという形をしています。そして、何一つ同じものは見つからないと聞いたことがあります。これらを引き起こしているのは誰か、と神は問われているのです。

38:31 あなたはすばる座の鎖を結びつけることができるか。オリオン座の綱を解くことができるか。38:32 あなたは十二宮をその時々にしたがって引き出すことができるか。牡牛座をその子の星とともに導くことができるか。38:33 あなたは天の法令を知っているか。地にその法則を立てることができるか。

天体の運行についても同様です。ここにあるように、星座と呼ぶことのできるほど、あまりにも規則正しい動き方をしています。天体の運行に法則を見つけたのはケプラーであり、彼は熱心なキリスト者でありました。彼は聖書信仰によって天体には法則があると信じて、膨大な計算を始めたのです。ニュートンもしかし、ガリレオもしかし、神がこの天と地に法則を作っていると信じていたからこそ、天体や物理の法則を発見しました。

38:34 あなたの声を雲にまであげ、みなぎる水にあなたをおおわせることができるか。38:35 あなたはいなずまを向こうに行かせ、「私たちはここです」とあなたに言わせることができるか。38:36 だれが心のうちに知恵を置いたか。だれが心の奥に悟りを与えたか。38:37 だれが知恵をもって雨雲を数えることができるか。だれが天のかめを傾けることができるか。38:38 ちりが溶け合っかたまりとなり、土くれが堅く固まる時。

神は、土くれが堅く固まる雨季の始まり、秋の雨について言及されているようです。ここで強調されているのは、「あなたがこれらのことを命じているのか。」と、ヨブが収穫をもたらすことを支配しているのかと挑まれていることです。

ヨブは、苦しみの中にいるうちに、その苦しみを受けるに値するようなことは行ったことはないと言いました。そのために、「自分が」と言って、自分が行なっていることに焦点を当てていき、本質的なことは神が行っているであって人ではないということを見失っていました。そこで神は、「お前がこれらのことを行なったのか。」と問い続けておられるのです。神が行い、そして人は応答するのです。しかし人が行い、それで神が応答しなければいけないと立場をあべこべにしてしまった

のです。

3A 御しえない動物 38:39－39:30

次に神は、生きている動物の生態にヨブを導き入れます。動物と言っても、人間が育てる家畜ではなく、人の手が全く入っていないくてもたくましく生きる野生の動物の生態を見せていきます。地上にあるもの、動物であれば自分が制御できると思うかもしれませんが、実はそうではなことを教えています。

1B 全く神に拠り頼む動物 39－41

38:39 あなたは雌獅子のために獲物を狩り、若い獅子の食欲を満たすことができるか。38:40 それらがほら穴に伏し、茂みの中で待ち伏せしているときに。38:41 鳥の子が神に向かって鳴き叫び、食物がなくてさまようとき、鳥にえさを備えるのはだれか。

獅子は百獣の王と呼ばれますが、聖書でも獅子が動物界において王のような存在として描かれています。その獅子までが草を羊と共に食べるというところまで、神の正義と平和が広がるというのが、イザヤ書 11 章にある千年王国の姿です。しかし今は、人が決して御することができない、いや今や動物園で御しているかもしれないけれども、実は野生のほうの方が彼らは生きていくことができる存在です。人が関与しないほうが生きられるのです。

同じように鳥も自分たちで生きていきます。そして鳥は、他の動物の死骸を食べる、律法によれば汚れた動物とされています。実は獅子も、足にひずめがないし、反芻しないので動物ではないので、汚れた動物とみなされます。したがって、イスラエル人が読めば、「人との関わりを持たない動物」とみなされます。しかし、彼らはたくましく生きているのです。実に、鳥の子が餌を求めて鳴き叫んでいる時に、それは神に向かって叫んでいるのです。イエス様がこのことを弟子に教えられました。「ルカ 12:24 鳥のことを考えてみなさい。蒔きもせず、刈り入れもせず、納屋も倉もありません。けれども、神が彼らを養ってくださいます。あなたがたは、鳥よりも、はるかにすぐれたものです。」

人間は、神のかたちに造られました。それは、地のすべての生きている物を支配させることによって表れます(創世 2:26)。この支配、あるいは管理は、かなり曲者です。なぜなら、支配や管理をしているがゆえに、自分が何者かをすっかり忘れさせる力を持っているからです。私たちは神のかたちに造られたのであり、神ご自身ではないのです。似ているけれども、あくまでも動物と同じ被造物であり、圧倒的な違いがあるのです。

そのために、神はエデンの園の中央にある、善悪の知識の木から実を取って食べてはならないと命じられました。善悪についての判断の根本は神の領域にあります。しかし、それをとことんまで突き詰めたいと願うのが人間です。しかし、それは自分と神との境界線を無くすことに他なりま

せん。その究極の判断は神を恐れる、神に任せるというところで収めなければいけません。けれども悪魔は、「神のように賢くなれる」とエバを唆しました。

そのために、この地上は呪われたものとなりました。人が全てを治めているのではないのです。悪魔がこの世の神と呼ばれるようになりました。神が支配されているのですが、神は悪魔の仕業をも含めて、主権をもって支配されています。したがって、海の存在もあるし、死の存在もあるのです。そして動物の世界も、神が初めに造られた意図とは異なるものが出来上がりました。初めはすべての動物が草を食べるように造られましたが、ノアの時代の洪水の後には、動物が他の動物を食べる弱肉強食になりました。しかし、それらをも神が支配されて、そして人に対して「お前たちは神ではないのだ、わたしが神なのだ。」と言って、人が神に服するように促しておられるのです。

2B 人の営みを嘲笑う動物 1-25

39:1 あなたは岩間の野やぎが子を産む時を知っているか。雌鹿が子を産むのを見守ったことがあるか。39:2 あなたはこれらがはらんでいる月を数えることができるか。それらが子を産む時を知っているか。39:3 それらは身をかがめて子を産み落とし、その胎児を放り出す。39:4 その子らは強くなり、野原で大きくなると、出て行って、もとの所には帰らない。

岩間に住む野山羊や鹿の出産と子育てについて教えています。そのような厳しい環境の中で母親までが産み落とす、放っておかれる中で、それでもきちんと育ち、独り立ちするという姿を描いています。人間とは対照的です。

日本社会の病は、ここにあります。「たくましく生きる」というものが存在しないようにさせています。あたかも自分たちが守り、保護しなければ生きられないと考えていきます。母親が子を、責任をもって育てなければいけないのは全くその通りですが、子を守り成長させているのは神なのです。そして、私たちは人間の制度に多少の欠陥があると容赦なく責め立てます。しかし、神は人に管理を与えられましたが、しかし人を生かしているのは神なのです。この境界線が壊れてしまったので、人がノイローゼになったりして、病として表れています。

39:5 だれが野ろばを解き放ったのか。だれが野生のろばの綱をほどいたのか。39:6 わたしは荒れた地をその家とし、不毛の地をその住みかとした。39:7 それは町の騒ぎをあざ笑い、追い立てる者の叫び声を聞かない。39:8 山岳地帯はその牧場、それは青い物を何でも捜す。

「解き放つ」とか「綱をほどく」というのは、人が家畜に対して放牧の時に行うものです。しかし、野生の驢馬は、全くその制御を受けることはありません。しかも、私たちの人間の生活の拠点である町の騒ぎをあざ笑うかのように、自由自在に不毛の地で生きています。ここでも、人間が自分たちの管理で生きているのだという傲慢を打ち砕いています。むしろ、その過剰な管理によって、かえってストレスで命を失っている姿も明らかにしています。

39:9 野牛は喜んであなたに仕え、あなたの飼葉おけのそばで夜を過ごすだろうか。39:10 あなたはあぜみぞで野牛に手綱をかけることができるか。それが、あなたに従って谷間を耕すだろうか。39:11 その力が強いからといって、あなたはそれに拠り頼むだろうか。また、あなたの働きをこれに任せるだろうか。39:12 あなたはそれがあなたの穀物を持ち帰り、あなたの打ち場で、これを集めるとでも信じているのか。

同じ牛でも、野牛を家畜にしようなど思わないだろう、と神は言われます。ヨブは、数多くの牛や羊を飼っている大富豪でした。しかし、その彼とて野牛はどうにも手なずけることはできないことを知っています。ヨブに対して、あなたは無力なのだということを神は教えておられます。

39:13 だちょうの翼は誇らしげにはばたく。しかし、それらはこうのとりの羽と羽毛であろうか。39:14 だちょうは卵を土に置き去りにし、これを砂で暖めさせ、39:15 足がそれをつぶすことも、野の獣がこれを踏みつけることも忘れていて。39:16 だちょうは自分の子を自分のものでないかのように荒く扱い、その産みの苦しみがむだになることも気にしない。39:17 神がこれに知恵を忘れさせ、悟りをこれに授けなかったからだ。39:18 それが高くとびはねるとき、馬とその乗り手をあざ笑う。

神は、奇妙な生態をもっている駝鳥を取り上げておられます。神がヨブに見せられている動物の中で、駝鳥の例は際だっています。なぜなら、駝鳥は説明と予測不能だということです。なぜ、羽があるのに飛ぶことができないのか？ 巣を土にして他の獣の餌にされることを気にしないのに、馬よりも早く走るのか？ 説明できないし、予測もできません。

私たち人間は、あまりにも自分たちのしていることを説明しなければいけないと信じています。そして、いつでも何が起こるのか予測しなければすまないと思っています。しかし、どうしてそう拘るのでしょうか？ 自分が支配したいという欲望から来ているのですね。説明できずとも、実にそこにあるという現実を受け入れたくないのです。

39:19 あなたが馬に力を与えるのか。その首にたてがみをつけるのか。39:20 あなたは、これをいなごのように、とびはねさせることができるか。そのいかめしいいななきは恐ろしい。39:21 馬は谷で前搔きをし、力を喜び、武器に立ち向かって出て行く。39:22 それは恐れをあざ笑って、ひるまず、剣の前から退かない。39:23 矢筒はその上でうなり、槍と投げ槍はきらめく。39:24 それはいきりたって、地を駆け回り、角笛の音を聞いても信じない。39:25 角笛が鳴るごとに、ヒヒーンといいななき、遠くから戦いをかぎつけ、隊長の怒号と、ときを聞きつける。

駝鳥とは違いますが、しかし驚くような優れた能力を馬が持っていることを教えています。人間の兵士のことを考えてください。敵陣からの攻撃に対して、いかにそれを恐れずに立ち向かっていく

ことができるのかが、戦闘における大事な要素になります。馬には、そのような恐れが一切ありません。だからといって、無謀ということでは決してありません。隊長の怒号やときの声をたとえ遠くからでも聞きつけて邁進することができるのです。

3B 主の力を示す動物 26-30

主は、百獣の王である獅子から始められましたが、終わりは鳥獣の王である鷹と鷲で締めくくります。

39:26 あなたの悟りによってか。たかが舞い上がり、南にその翼を広げるのは。39:27 あなたの命令によってか。鷲が高く上がり、その巣を高い所に作るのは。39:28 それは岩に宿って住み、近寄りたいたい切り立つ岩の上にいる。39:29 そこから獲物をうかがい、その目は遠くまで見通す。39:30 そのひなは血を吸い、殺されたものがある所に、それはいる。

鷹は、全くヨブも、他の人間も操ることのできない存在です。翼を広げて、人間が到達することのできない断崖絶壁に巣を作ります。そして、そこから自由自在に獲物を取ります。ひながその獲物の生き血を吸っている姿から、圧倒的に空の生き物世界を支配している姿を見ることができます。

しかし、そのような恐ろしい猛禽でさえ、神に完全に服しているのです。イエス・キリストが再臨される時に、反キリストの率いる世界の軍隊のしかばねを思う存分食べよと命じられて、それを「神の大宴会」と読んでおられるのです。「黙示 19:17-18 また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。「さあ、神の大宴会に集まり、王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」

そして空の上で止まるようにして風に乗る鷲を、神は主を待ち望み新たな力を得る存在としてお見せになっています。「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。(イザヤ 40:31)」

いかがでしょうか。動物はこのようにして神に服しています。神中心に生きています。これをできないのが人間です。神のかたちに造られ、その自由意思と知性が与えられたがゆえに、服することを忘れ人間中心に生きていくのです。しかし、そこに悪魔の攻撃があります。神のように賢くなりたいと願うその欲望を使って神に歯向かうようにさせるのです。次回、ヨブがついに神に服する場面を読みます。そこで初めて彼は、サタンによって始まった苦しみから解放されます。ヤコブ書を最後に引用します。「ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。(ヤコブ 4:7)」